The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	郭店楚簡・上博楚簡の字体と形制
Author(s)	福田, 哲之
Citation	中国研究集刊. 2003, 33, p. 72-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61221
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【附録】

郭店楚簡・上博楚簡の字体と形制

紙に活字で印刷された一般の文献資料に対して、一次資料である出土文字資料の検討においては、内容のみならず、字体や形制などの形式面にかかわる諸点を総合的に踏まえる必要がある。ここでは、字体と形制とを中心に郭店楚簡・上博楚簡の特徴を見てみたい（詳細については「形制一覧」参照）。なお、本稿では字体の語を形体（点画）上の差異に関わる字形、様式上の差異に関わる書体、個人の風格上の差異に関わる書風の三方面を包括した意味に用いる。

一　郭店楚簡の字体と形制

郭店楚簡を字体や形制などの形式面から分類し、全体構成を明らかにせんとする試みは、すでに複数の先学によってなされてきている。その中でも注目される研究に、李零「郭店楚簡校読記」附録：郭店楚簡的字体和形制（『道家文化研究』第十七輯、生活・読書・新知三聯書店、一九九九年八月）、周鳳五「郭店竹簡的形式特徴及其分類意

［別表一］（「文献」の番号は『郭店楚墓竹簡』の掲出順）

文献	李零	周鳳五
1.『老子甲』 2.『老子乙』 3.『老子丙』 1.『太一生水』 16『語叢四』	第一種字体	第一類
3『緇衣』 6『五行』 4『魯穆公問子思』 5『窮達以時』	第二種字体	
7『唐虞之道』 8『忠信之道』	第三種字体	第四類
9『成之聞之』 10『尊徳義』 11『性自命出』 12『六徳』	第四種字体	第二類
13『語叢一』 14『語叢二』 15『語叢三』	第五種字体	第三類

義」（武漢大学中国文化研究院編『郭店楚簡国際学術研討会論文集』湖北人民出版社、二〇〇〇年五月）が挙げられる。

ここで両氏の分類を対照して示すと［別表一］の通りである。なお、以下では類別の問題に論点を限定し、各種・各類の順序の問題には立ち入らない。

両氏の相違は、李氏が『老子甲』『語叢四』『老子乙』『老子丙』『太一生水』を第一種字体、『緇衣』『五行』『魯穆公問子思』『窮達以時』を第二種字体とするのに対し、周氏は両者を一括して第一類とする点である。李氏の分類の内、第三種から第五種の各類を異なる字体と見る点は周氏も同様であり、簡長・簡端・編線数・編距といった形制面からもその妥当性が裏付けられる。

李氏は第一種字体の文献を「道家和道家陰謀派的文献」、第二種字体から第五種字体までを「儒家文献」としており、第一種字体と第二種字体との区分には学派上の区分が反映されている。しかし、字体という点に限定するならば、第一種字体と第二種字体との間には、第三種字体から第五種字体までに見えるような明瞭な相違は認められず、形制面からも両者を区分する理由は見いだされない。李氏の字体区分は、あたかも道家文献と儒家文献との間に字体上の相違が存在するような誤解を招く恐れがある。現在のところ郭店楚簡の字体の大枠については、周氏の分類が最も穏当であると考えられる。

以下、この四分類に基づき、郭店楚簡の字体に関して二点を指摘しておきたい。

まず第一は、第一類から第四類までのうち、第一類・第二類・第四類は何れも比較的草卒な書風であるのに対し、第三類は謹直な書風を示す点である。つまり、前三者は主に書写者の相違によると見なされるのに対し、後者には用途などの書写者とは異なる要因が考慮される。したがって、前三者には類をまたがる同一の書写者を想定し難いのに対し、第三類には、例えば第一類に属する書写者が謹直な字体を用いて書写した可能性も指摘されるのである。このような謹直な字体は、上博楚簡を含む現在知られる楚簡には見いだされず、きわめて特殊な例と推測される。第三類には、字体だけでなく簡長と編線数との関係、一簡の容字数などにも特殊性が見られ、内容の検討においては、これら形式面との整合的な理解が不可欠となる。

第二は、各類の書風・字形の分析結果と形制との関連から、［別表二］のような同筆・同冊の可能性が指摘される点である（一は同筆・別冊、‖は同筆・同冊）。

ただし第二類については、四篇の竹簡を合計すると一

九五簡となり、分量の点から何冊かに分冊されていた可能性が高い。しかし、字体や形制の一致から、四篇が同冊と同等の緊密な関係を有していたことは明らかである。また、第三類の『語叢三』には三人の書写者が想定され、そのうちの一人が『語叢一』『語叢二』を書写したと見なされる。

同筆と推定される文献には道家思想としての纏まりをもつ『老子乙』『老子丙』と『太一生水』、子思およびその後学との関連が指摘される『緇衣』と『五行』など、思想内容の面でも緊密な関係を認めることができ、各篇の思想的関連や冊書としての構成などを検討する上で重要な示唆を与える。

なお、第四類の『唐虞之道』『忠信之道』は共通した様式をもち、他の各類とは明確に異なるが、両者には同時に細部の形体に相違があり同筆とは認めがたい。したがって第四類は、類似の書風をもつ複数（二人）の書写者によるものと推定される。

［別表二］

○第一類

『老子乙』
—
『老子丙』＝『太一生水』

『緇衣』＝『五行』

『魯穆公問子思』＝『窮達以時』

○第二類

『成之聞之』＝『尊徳義』＝『性自命出』＝『六徳』

○第三類

『語叢一』
—
『語叢二』
—
『語叢三』

二　上博楚簡の字体と形制

上博楚簡については未だその全容は明らかにされていないが、字体と形制に関して現時点における問題点をまとめておきたい。

まず字体の面では、第一分冊の『孔子詩論』と第二分冊の『子羔』『魯邦大旱』とが同筆と見なされ、簡端や簡長の共通性から同冊であった可能性が極めて高い。また『従政（甲篇）』と『従政（乙篇）』とは同筆と見なされ、他の『民之父母』『昔者君老』『容成氏』はそれぞれ別筆と推定される。なお、第一分冊の「釈文考釈」によれば、『性情論』は『周易』『恆先』と同筆とのことであり、『恆先』は道家文献であることが第一分冊の序に明言されていることから、詳細は不明ながら、同一人物が儒家系文献と道家系文献とを書写した例として注目される。なお、現時点では郭店楚簡と上博楚簡との間に同筆の文献を確認するに至っていない。

次に形制の面では、全体的な特徴として、郭店楚簡に比べて上博楚簡は簡長が長い点が指摘される。郭店楚簡の最長は三二・五㎝であったが、今のところ上博楚簡の最長は五五・五㎝、最短でも四二・六㎝である。こうした簡長の差は、両者が形制の面で別系に属することを示すものであり、「上博楚簡総論」において指摘した郭店楚簡と上博楚簡との儒家文献における系列の相違とも密接な関連が予想される。

最後に表題の問題について触れておきたい。郭店楚簡では、表題は『五行』のみに見られ、冒頭に位置する第一簡の本文の最初に「五行」の二字があり、それに続いて本文が記されている。上博楚簡では、今のところ『子羔』と『容成氏』の二篇に表題が見え、『子羔』は冒頭に近い第五簡の背面に「子羔」とあり、『容成氏』は末尾に近い第五三簡の背面に「訟城氏」と記されている。『子羔』と『容成氏』とに見られる表題の位置の相違は、『子羔』が末尾の簡から巻き込んで冒頭部分が巻の表にくる形式であったのに対し、『容成氏』の方は先頭の簡から巻き込んで末尾部分が巻の表にくる形式であったことを物語っている。

こうした収巻の相違について注目されるのは、冨谷至「二一世紀の秦漢史研究―簡牘資料―」（『岩波講座 世界歴史3 中華の形成と東方世界』岩波書店、一九九八年一月）の見解である。冨谷氏は、睡虎地秦簡『封診式』や張家山二四七号漢墓『奏讞書』の表題が最終簡の背面に記入されていることに注目し、居延新簡などの検討を通して、表題が第一簡の背面にあるのは完結した書物と

してまとめられた「書物簡」であり、最終簡の背面にあるのは完結した書物となる前の「ファイル簡」であるとし、両者を性格の異なる二種の書写物とみている。

この見解にしたがうならば、『子羔』はすでに完結した「書物簡」であるのに対し、『容成氏』は情報が蓄積されている途中の「ファイル簡」ということになる。『容成氏』は、上博楚簡の他の諸篇とは異なり、歴代の王の系譜を記した文献であり、こうした特色を踏まえるならば、『容成氏』が情報を蓄積していくのに都合がよいファイル形式であることは注目に値する。ただし、『容成氏』は伝説上の古帝からはじまって周の武王が殷を討伐したところで終わっており、これが書物となる前の編纂途中の段階であったかは、なお慎重な検討が必要であろう。この問題については、当然のことながら行政文書と歴史書といった文献の性格の相違を考慮する必要があり、完結した書物が「ファイル簡」の形式で行われる場合もあった可能性も指摘される。

上博楚簡の全容が明らかになれば、これらの諸点を含めて、字体や形制に関するさらに多くの重要な知見が得られることが期待されよう。

（福田哲之）